様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０７９

研究課題名（和文）ホロコースト後の精神分析運動史―ディアスポラとユダヤ的なものの運命

研究課題名（英文）History of Psychoanalytic Movements After the Holocaust - Diaspora and Vicissitudes of Jewishness

研究代表者
立木　康介（TSUIKI, Kosuke）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：７０３１４２５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：ナチス・ドイツのホロコーストにより精神分析の世界地図が塗り替えられた第二次大戦以後、精神分析の社会的・制度的発展の裏面をなすかのように繰りかえされた精神分析家組織の度重なる分裂・離散の過程を辿った。分析家たち自身によって「ディアスポラ」にも準えられ、今日の精神分析の世界的衰退の遠因にもなったこの分裂・離散の様相は、しかし、第二次大戦以前に非ユダヤ人のリーダーを見いだしていたフランスと、同じ時期にもっぱらユダヤ人によって先導され、大戦中も迫害を逃れてヨーロッパから移住してきた多数のユダヤ人分析家を受け入れた米国とでは、事情が異なる。その理由を、文献と調査にもとづいて考察した。

研究成果の概要（英文）：The project traced back the process of splits and scatterings of psychoanalytic organizations, which spread as in the reverse of the social and institutional developments of psychoanalysis, after the World War II which had provoked many changes in the geography of this discipline, following the Holocaust under the Nazism. The aspects of these splits and scatterings that psychoanalysts themselves dare to compare to the Diaspora and that one could consider as being behind the general decline of psychoanalysis in the whole world, are however different between France which found out a non-Jewish leader before the War and the United States where, in the same period, the discipline was mostly conducted by Jewish analysts and, during the War, were taken in still many Jewish analysts who escaped from Europe where they were persecuted. Based on the literature and documents on the subject, the project searched the reasons of these differences.

研究分野：精神分析

キーワード：精神分析　ユダヤ性　ホロコースト　ディアスポラ　ニューヨーク精神分析協会　パリ精神分析協会　組織分裂　ラカン派

１．研究開始当初の背景

報告者は、平成 24 年から 26 年にかけて、「精神分析と左翼思想」というテーマで科学研究費(基盤 C／社会思想史)の助成を受け、主に 1920～30 年代ベルリン、及び 1960～70 年代パリにおける精神分析とマルクシズムの接近とすれ違いについて、また、米国において精神分析と左翼思想の結合を事実上不可能にした精神分析の徹底した「医学化」について、研究を進めてきた。その結果、社会的実践としての精神分析が歴史的に政治化しえなかったのは、独自の集団形成の論理を創発することができなかったか、あるいは、創発はしても、それを実践に移すことができなかったためである、という結論に達した。

ところで、これらの研究を進める過程で、報告者は繰りかえし、精神分析に刻印された「ユダヤ性」ないし「ユダヤ的なものの影響」という問いにぶつかり続けた。ワイマール体制下で花開いた、精神分析運動史上最も重要な成果のひとつ、ベルリン精神分析インスティトゥート（1920 年設立）の内部で試みられた精神分析とマルクシズムの融合は、「ユダヤ人の科学」たる精神分析の殲滅を目論むナチス・ドイツによって、インスティトゥートの実質的な機能もろとも終止符を打たれた。1960～70 年代にかけてフランスにおける精神分析の社会的ポピュラリティを一挙に押し上げたジャック・ラカンは、1963 年に自らが国際精神分析協会から「破門」された理由を、彼が「精神分析の原罪」と呼ぶ「フロイトのなかで分析されずに残っているもの」、すなわち「ユダヤの宗教との関係」を問いに付そうとしたことに帰した。さらに、米国における精神分析の医学化は、左翼イデオロギーにたいする防波堤の役割を果たしたものの、分析家組織の度重なる分裂を食い止めることはできず、これらの分裂の際には、ナチズムによる迫害を逃れてヨーロッパから米国に亡命したユダヤ人分析家たち同士の軋轢や、これらの分析家と米国人分析家たちのあいだの葛藤がしばしば大きな役割を演じていた。

こうした事実を前にして、報告者は、精神分析の歴史的展開をいっそう明確に捉えるためには、精神分析がユダヤ的なもの（ユダヤ教、ユダヤ思想）といかなる関係を結んでおり、それが精神分析の実践、理論、および集団形成にいかなる直接・間接の影響を及ぼしてきたのかを、文献と調査にもとづいて実証的に検証することが不可欠であると考えるようになった。それが本研究を構想するに当たっての背景であり、モチーフである。

２．研究の目的

精神分析とユダヤ的なものの関係を探る上でひとつのキーワードになるのは「ディアスポラ」（離散）である。

ジークムント・フロイトの娘アンナは、1934 年、ユダヤ人の精神分析家が次々とドイツから脱出してゆく事態を「新たな形のディアスポラ」と呼ぶことをためらわなかった。たしかに、それまでにもユングやアードラーといった異分子の離脱を経験し、第一次世界大戦とそれに続くヨーロッパの政治的・経済的混乱による打撃に見舞われていたとはいえ、1910 年に国際精神分析協会（IPA）が設立されて以来、持続的に成長を続けてきたといってよい「精神分析運動」を間近で見てきたアンナにとって、1920 年のベルリン精神分析インスティトゥート設立により事実上世界の精神分析の中心地となっていたドイツを逃れて海を渡るユダヤ人分析家たちの姿が、「第二神殿」の破壊のあとイェルサレムから四散していったユダヤ教徒たちの記憶に重なって見えたことは驚くに当たらない。その 4 年後には、オーストリーを占領したドイツ軍にアンナ自身が身柄を一時拘束され、それまでウィーンを離れることを頑なに拒んできたフロイトもいよいよ重い腰を上げることになるだろう（1938 年、フロイ

トはパリを経由してロンドンに亡命する)。だが、精神分析家たちの真の「ディアスポラ」、すなわち、彼らが形づくる国際組織の統一性を脅かし、教義の内容にまで分断を刻まずにはおかないような離散がはじまるのは、それより後のことだった。とりわけ二つのパラダイムが重要である：

1/ 1941 年から 50 年にかけて米国で続いた一連の組織分裂。そこでは、精神分析家の訓練制度をめぐる立場の違いに加えて、ヨーロッパ出身のユダヤ人分析家同士の、あるいは、米国に生まれ育った分析家と亡命ユダヤ人分析家のあいだの、軋轢が問題になった。

2 /1980 年にラカンが自らの学派「パリ・フロイト派」(EFP)を解散したのち、フランスのラカン派分析家たちが陥った「ディアスポラ」。1980 年代から 2000 年代初頭にかけて、四分五裂を繰りかえしたラカン派組織の数は、今日ゆうに 20 を越える。フロイト以後、精神分析の世界で真に「学派」の名に値する集団を作り上げることができた分析家のなかで、ただひとり非ユダヤ人だったラカンは、精神分析のユダヤ性を問いに付すことを怖れず、精神分析の「脱ユダヤ化」の道を公然と模索していた(ただし、それは反セム主義とはいっさい関係がない)。とすれば、そのラカンが没したあと、ラカン派分析家たちが陥ったディアスポラが、いかなる歴史的意味をもつのかを、見きわめなくてはならない。

それぞれ米国とフランスを主な舞台として生じたこれら二つの離散状態は、そこに至る経緯も、それをもたらしたロジックも、大いに異なっている。にもかかわらず、どちらの場合も、精神分析の社会的ポピュラリティが飛躍的に高まった時期に、分析家組織の分裂がはじまり、長く尾を引いた点で共通している。同時に、これらのディアスポラは、米国では、1960 年代後半から 80 年代にかけて、生物学的精神医学(脳科学、薬物療法)と行動主義心理学の台頭に呑み込まれて、精神分析が急激に衰退することの、またフランスでは、2000 年代以降、やはり脳科学と認知行動療法からの激しい攻撃にたいして、分析家たちが統一的な連帯によって太刀打ちできないことの、遠因となっている。本研究では、これらのディアスポラがいかなる必然性によってもたらされたのかという問いを軸に、ホロコースト以後の米国およびフランスの精神分析史をたえざる分派の歴史として捉え直すとともに、そのなかでさまざまに出会われる精神分析とユダヤ的なものの結合の諸帰結をつぶさに検証し、その総体を浮かび上がらせることがめざされた。

３．研究の方法

本研究は基本的に文献研究と資料調査によって進められる。そのプロセスは大きく三つに分けられる。1/ 既刊の文献・資料を総括すること。その対象となるコーパスは二つの群を含む。A/ 精神分析とユダヤ的なものの関係をフロイトについて論じた研究、B/ この関係についてのラカンの発言と、それらの発言についてのラカン派分析家たちの解釈(が記された文献・資料)。2/ ホロコースト以後(第二次世界大戦以後)の精神分析史にかかわる活字化されていない資料(未公刊のオーラル・ヒストリーや草稿類)を、米国およびフランスを中心に、包括的かつ系統的に調査、収集すること。3/ 上記 1, 2 から得られたデータをもとに、本研究の目的に沿った精神分析史の再構成を行うこと。

このうち、1 については、出版された書籍群からなる輪郭のはっきりしたコーパスが、すでに A 群・B 群ともに存在する。これにたいして、2 については、報告者が自らの手で関係機関の図書館やアーカイヴを調査し、多くの場合まだ活字化されていない一次資料を発掘・収集しつつ、研究のコーパスそのものを確定するところからはじめなければならない。その際、報告者がとくに重視したの

は、①米国議会図書館所蔵の精神分析アーカイヴ、②米国コロンビア大学図書館所蔵の精神分析家オーラル・ヒストリー・コレクション、③パリ精神分析協会ジークムント・フロイト図書館の雑誌アーカイヴである。

４．研究成果

目に見える大きな成果としては、まず、上欄②のコレクションの写真データによる収集が、1 点（Willi Hoffer のオーラル・ヒストリー）を除きほぼ完了したこと、及び、同欄③について、フランスのユダヤ系雑誌（1960 年代～90 年代）における「精神分析」特集や精神分析についての記事を系統的に収集し、ひとつのコーパスを構築できたことが挙げられる。

研究内容については、本課題全体にかかわる成果をまとめるまでには至らないものの、以下のことが明らかになった。

1/ およそ 1941 年から 50 年にかけて（ただしこれは 70 年代後半にまで尾を引く）米国の精神分析家たちのあいだに生じた「ディアスポラ」（ここでは地理的離散状態ではなく、組織上・制度上・教義上の分断状態を指す）には、五つの分裂劇が含まれる。すなわち、（1）「文化主義」を標榜してエディプスコンプレクス中心の古典的精神分析との訣別を謳うカレン・ホーナイの、ニューヨーク精神分析協会（NYPS）からの離脱（1941）、（2）コロンビア大学メディカル・スクール内部に独自の訓練システムを移植した S・ラドとその一派の、同じく NYPS からの離脱（1944）、（3）ワシントン＝ボルティモア精神分析協会内部での対立に端を発する、H・S・サリヴァンを中心とする W・A・ホワイト・インスティテュート一派の、米国精神分析協会（ApsaA）からの締め出し（1947）、（4）訓練システムをめぐるフィラデルフィア精神分析協会の分裂（1948）、そして、（5）やはり訓練システムをめぐるロサンジェルス精神分析協会の分裂（1950）である。これらのうち、本研究でとくに集中的に検討されたのは、（2）の分裂劇についてである。ラドは、米国精神分析史の正史ともいうべき『米国における精神分析の擡頭と危機』（1995）において、ネイサン・ヘイルが「ニューヨークはベルリン〔精神分析インスティトゥート〕が創始したことをコピーし、究極的に厳格化した」と総括するプロセスを推進した中心人物のひとりだったが、この分裂劇によって、当時 NYPS の指導的立場にあったユダヤ人分析家たちのあいだに禍根を残した。そのことは、1950 年代に H・ハルトマン、E・クリスらと共に NYPD を代表する分析家となったルドルフ・ルウェンスタイン（1920 年代にベルリン精神分析インスティトゥートで訓練を受けたルウェンスタインは、米国に移住する以前、パリでフランス精神分析の草創期を支え、1930 年代にはほかならぬ J・ラカンの訓練分析を担当した）が、そのオーラル・ヒストリーのなかで、ユダヤ人のジョークを引き合いに出しながら、米国白人文化に同化してユダヤ人を侮蔑しはじめるユダヤ人の典型としてラドを批判している件からも読みとることができる。だが、ニューヨークの精神分析ミリユーにおけるこうした軋轢は、たんに、ナチス・ドイツによる迫害を逃れて米国に亡命したユダヤ人分析家同士の反目という図式には還元できない。というのも、米国には、第二次大戦の直前および戦中に米国に移住したこれらのユダヤ人分析家に加えて、1911 年に NYPS を創設したエイブラハム・ブリルのように、もっと早い時期に米国に渡ったユダヤ人分析家や、戦後の米国精神分析を牽引した実力者のひとりベルトラム・ルウィンのように、そもそも米国のユダヤ人家庭に生まれ育ち、ヨーロッパに留学して分析のトレーニングを受けた若い分析家もいたからだ。1940 年代から 50 年代にかけて NYPS を覆い続ける対立や葛藤は、社会文

化的背景や素性の異なるこれらのユダヤ人分析家たちの思惑が複雑に絡み合う権力闘争だったといってよい。これらの事情については、近く一本（ないし複数）の論文にまとめる予定である。

2/ 他方、フランスにおける分析家たちの「ディアスポラ」については、①ユダヤ人同士の反目という構図は見られない、②主として「ラカン派」を名乗る人々のあいだに起きる現象である、という二つの特徴を見逃すことができない。これについては、まだ試論の段階だが、ひとつの仮説を提出できるように思う。フランス精神分析の「第一分裂」である1953 年のそれ（当時唯一の分析家団体だったパリ精神分析協会 SPP から、ダニエル・ラガーシュ、ジャック・ラカン、フランソワーズ・ドルトらが離脱した）は、第二次大戦後に新設されたインスティテュートの主導権をめぐる権力闘争の結果だった。その背景には、政治的・イデオロギー的対立と並んで、たしかに人種的葛藤も見いだされる。すなわち、結果的に SPP に残留することになるグループ（サッシャ・ナシュトに率いられる陣営）の若手（のちに国際精神分析協会会長の地位にまで上り詰めるセルジュ・ルボヴィシ、のちに哲学者ルイ・アルチュセールの治療者になるルネ・ディアトキンら）は、概ね共産党員もしくは共産党シンパであると同時に、ユダヤ人でもあったのである（これにたいして、SPP を離脱する主要な面々は、ユダヤ人ではなかった）。だが、この人種的葛藤は、53 年の分裂の趨勢を決したマリー・ボナパルトによって、いわば中和された。このことの重要性はいくら強調してもしすぎることはないように思われる。当初、ナシュト陣営に対立すると見られていたボナパルトは、おそらくその押さえがたい反ラカン感情のゆえに、最終的にナシュトと手を組み、ラカンらを辞任に追い込んだ。だが、皇帝ナポレオン・ボナパルトの弟の曾孫で、ユダヤ人ではなかったマリー・ボナパルトが、先鋭化した若手ユダヤ人分析家たちがひしめく陣営をいわば抱き込んだことで、このきわめて政治的な分裂劇から「人種問題」の側面が完全に消去されることになったのである。その後、SPP から分派は生まれなかった。これにたいして、後年の分裂（1963 年、1969 年、および 1981 年以降ラカン派の内部で止まなくなる分裂）は、すべてラカン（の教え）を争点とする分裂か、あるいはラカン派を名乗る分析家のあいだでの分裂になる――あたかも、ユダヤ的ディアスポラの運命は、もっぱらラカン派のみによって引き受けられるかのように。ホロコースト後の世界において、精神分析のユダヤ性の問題に最も踏み込んだのはラカンだった。しかしそのラカンはこの問いを解かないまま死去し、残された彼の追随者たちが終わりなきディアスポラに陥った皮肉を、いかに――精神分析的に――解釈すべきだろうか。これについては、目下準備中のラカン派精神分析史についての著作で、報告者なりの見通しを提示する予定である。

一方で、課題もある。ラカン派のユダヤ人分析家のうち、この問いに最も肉薄したひとり、ジェラール・アダド（『精神分析の原罪』2007）が述べたように、「精神分析の原罪を正し、精神分析を脱ユダヤ化するというラカンの一貫した企図は、カバラの伝統を見誤ったために挫折した」とするテーゼが妥当なのかどうかを判断するところまでは行かないにせよ、本研究のまったき遂行には、ヘブライ語に習熟することがおそらく欠かせない。無意識を解読するフロイトの発想と方法は、トーラーの一語一句の「意味の揺れ」を徹底的に解釈し尽くそうとするタルムードの伝統と明らかに反響し合う。この印象はもちろん偶然ではない。フロイトがユングと交流を持つようになった当初、ユダヤ人医師カール・アーブラハムが、ユングにたいするフロイトの寛容に不平をこぼしたのを諫め

て、「私の見解を採用することは、貴方にとってのほうがユングにとってよりも容易であることを忘れてはいけない。なぜなら〔…〕人種的な近親性のゆえに、貴方のほうが私の知的体質に近づきやすいからだ」と述べたフロイトのことばは、まさに、精神分析とタルムードを繋ぐこの知的近親性の水準において捉えられなくてはならないだろう。そこから再出発する必要性を、本研究全体を通じて痛感させられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 立木康介、精神分析における原因と対象、実存思想論集、XXXI 巻、依頼有、2016、35-60

② 立木康介、応用精神分析と反哲学――医学、哲学と精神分析、哲学の探究、第 43 号、依頼有、2016、29-56

③ 立木康介、フランス精神分析の分派と訓練制度、精神療法、第 42 巻第 3 号、依頼有、2016、374-377

④ 立木康介、ラカンと女たち 第 VII 回 マリー・ボナパルト（前）――キャスティング・ヴォートを握るプリンセス、三田文学、No. 132、依頼有、2018、373-385

⑤ 立木康介、ラカンと女たち 第 VIII 回 マリー・ボナパルト（後）――盗まれ……買い戻された手紙たち、三田文学、No. 133、依頼有、2018、320-332

〔学会発表〕（計 4 件）

① 立木康介、夢の潜勢力――革命的に目覚めること、日本フランス語フランス文学会 2015 年度春期大会におけるワークショップ「フィクションの政治力」、招待有、2015

② 立木康介、精神分析における原因と対象、実存思想協会第 31 回大会における講演会「精神分析と実存」、招待有、2015

③ 立木康介、応用精神分析と反哲学――医学、哲学と精神分析、哲学若手研究者フォーラムにおけるテーマ・レクチャー「精神医学と哲学」、招待有、2015

④ 立木康介、精神分析の詩学――修辞、読解、エクリチュール、日本英語表現学会第 46 回大会記念講演、招待有、2017

〔図書〕（計 3 件）

① 立木康介、狂気の愛、狂女への愛、狂気のなかの愛、水声社、2016、240

② 市田良彦、王寺賢太編、現代思想と政治、分担執筆（ラカンの六八年五月――精神分析の「政治の季節」）、平凡社、2016、574-609

③ 石原孝二他編、精神医学の科学と哲学（『精神医学の哲学』1）、分担執筆（第 5 章「精神分析の実践と思想」）、東京大学出版会、2016、113-134

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/members/private/tsuiki_list.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
立木 康介（TSUIKI, Kosuke）
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号 70314250

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
DELILLE, Emmanuel
Researcher, Centre Marc Broch (Berlin)